

新井中央小だより

ホームページ <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html> No.249メールアドレス chuou@ac.city.myoko.niigata.jp 2020（令和2）年5月27日

「いのちは時間」

表題の言葉は、100歳を超えて現役医師、エッセイストであった日野原重明さん（享年105歳）の言葉です。初めてこの言葉を目にしたのは、日野原さんの著書「生きかた上手」がベストセラーになった時でした。当時の私は、「いのちは時間」と言われても、あまり実感がわきませんでした。しかし、この年になると（今年度末定年退職です。）、この言葉の意味の深さをかみしめることができます。

日野原さんは、10歳の時に急性腎炎を患い、1ヶ月間学校を休みました。この時、「しばらく運動ができないのなら・・・」と母の勧めで始めた習字やピアノが一生の楽しみとなりました。20歳の時、今度は結核で1年ほど療養生活を余儀なくされました。この療養生活をきっかけに作曲や小説執筆をするようになりました。その後、1970年の「よど号ハイジャック事件」に遭遇し、人質の一人となりました。解放された時は、「いのちを与えてもらった」と感じたそうです。これら3つの出来事は、日野原さんにとって身体的にも精神的にも非常に大きなストレスでした。しかし、そうした出来事を切り抜けるうちに、「ストレスを試練として受け止める」「耐えて待つ」という対処法を身につけたのだといいます。さらに、これらの出来事は、日野原さんが「いのちとは何だろう」と考えるきっかけとなりました。そして、導き出した一つの答えが、「いのちは時間である」ということです。

人質から解放された時「助けてもらったいのち、与えてもらったいのち。これからは、自分のためだけではなく、もっともっと人のために使おう。」と心に誓った日野原さんは、晩年、全国の小学校を回って「いのちの授業」をライフワークとして実践しました。

著書の中で、日野原さんは、こう述べています。「健康な人にも、病気の人にも、子どもにも、大人にも、すべての人に等しく時間が与えられています。それぞれの持つ長さに違いはあるけれど、この時間こそ、大切な『いのち』なのです。ですから、時間をいかに使うかで、その人のいのちの質が決まります。ぼーっとして、ただ無益に過ごすよりも、家族と団らんしたり、友人と会ったり、歌を歌ったり、時間を大切に使い、濃密な時を積み重ねていくことで、その人の人生までもが、充実したものに変わります。せつかく与えられている自分のいのちの時間を、自分らしく過ごそう、私はそう思ってこれまで生きてきました。」

今、コロナ禍にあり、時間の使い方は、いろいろな制約を受けています。でも、そんな中でも、自分にとっても、みんなにとってもいのちの質が高まるような時間の使い方ができたらと感じています。先日、3年生の自主開催ミニ運動会（体育1校時）に招かれ、開会、閉会のあいさつを述べてきました。明るく、元気に、一生懸命競技する姿を見て、とても嬉しく思いました。また先日始業前、クローバーを摘む1年生の女の子を見ていたら、「はい、校長先生、あげる。」と、クローバーのミニ花束をもらっちゃいました。今、セントポーリアの花といっしょにミニ花瓶に入れて校長室に飾ってあります。1週間たっても、元気に葉を広げています。見ていると温かな時間がゆったりと流れます。子どもたちとの時間を大切に過ごしていきたいと思います。本校の教育活動にご理解とご協力を引き続きお願いします。

校長 加藤 晃

